

令和3年3月17日

## 令和2年度第3回(第24回)ICT利活用教育の推進に関する事業改善検討委員会議事概要

1 開催日時 令和3年2月16日(火)14:00~16:00

2 開催場所 佐賀県庁新館11階大会議室

3 委員出席者(五十音順、敬称略)

野中陽一委員(座長)、天野昌明委員、板橋江利也委員、井手美保子委員、齊藤萌木委員、佐伯美由紀委員、佐藤正浩委員、田口弘毅委員、竹下繁己委員、中西美香委員、中野淳委員、西岡豊委員、森本貴彦委員、山下康孝委員、牟田尚敏委員代理

※Web会議にて参加

4 教育委員会出席者

落合教育長、青木副教育長、江口学校教育課長、見浦指導主幹、副島教育総務課長、嘉村副課長 他

5 議事概要

(1) 開 会 栗本教育情報化支援担当係長

(2) 教育委員会挨拶 落合教育長

(3) 報 告

ア 令和2年度の取組について(12月~)

### 【野中座長】

今年度の最後の委員会となるので、委員の皆様から様々な意見をいただきたいのでよろしく願います。では、事務局から令和2年度12月の報告をお願いします。なお、意見や質問については、事務局からの説明が全て終わった後に願います。

### 【事務局】

それでは、12月からの取組の中から「佐賀県教育フェスタ」について、説明させていただく。今年度の教育フェスタは、開催趣旨及び重点から「人づくりGIGA・SAGA」のサブタイトルで実施した。今年は、コロナ対策のため、映像配信のみの方法も考えられたが、特に子供たちがことごとく発表の場を奪われており、何とかその機会を確保したいことから、人数を制限しての会場参加と映像のライブ配信とのハイブリッド型で実施した。初めての試みであったが、映像配信や手話通訳等、外部の方々の方も借りながら、無事実施するこ

とができた。

それでは、特に ICT 活用に関するコンテンツについて報告する。まずは「GIGA スクール構想の実現に向けた取組事例発表」についてである。初めに、県教育委員会から、これから全県で取り組んでいきたいことを提案させていただいた。この件については、後程意見交換の中で話題にさせていただく。次に、県立中・高等学校から、1人1台端末を有効活用した取組とオンライン活用の取組を紹介していただいた。これから端末の整備が進む小中学校の関係者の方々には、授業・授業外の活用をイメージしていただけたのではないかなと思う。また、加速する GIGA スクール構想への対応状況について、鳥栖市教育委員会から報告いただいた。プロジェクトチームを立ち上げ、組織的に取組を進めていかれた流れがたいへん参考になったと、何人もの参加者から声をいただいた。次に「高校生 ICT 利活用プレゼンテーション大会」は、学校での準備が難しい状況であったと思うが、29 件の応募をいただいた。その中でも、初めて私立高校から応募や発表があり、コロナ渦の中ではあったが、たいへん嬉しい会となった。今年の最優秀賞は、ドローンの魅力とその可能性について、ステージ上での実演も交えながらプレゼンテーションを行った佐賀商業高等学校の2年生が受賞した。ドローンの視点で撮影された学校紹介の映像は未来を想像させ、発表者の熱い語りがドローンの魅力をよく引き出していた。その他、ステージ発表は予備審査を勝ち抜いてきた優秀作品であり、素晴らしい作品ばかりであった。例えば佐賀工業高校の独楽づくり。素材となる金属の特長を活かすため、旋盤技術を駆使して独楽を調整する映像が、プレゼンテーションの中で効果的に使っていた。佐賀農業高校からは、高校生カフェ「サノ・ボヌール」の活動や、専門高校ならではの特色ある活動の魅力を中学生に分かりやすく伝えたいという思いで作ったプレゼンテーションであった。佐賀商業高校からは、生徒が主体となったマスク制作プロジェクトについて。背景に映し出されるスライドとステージ上でパネル等を使った動きをうまくリンクさせていた。年々レベルが上がっているとの評価をいただいている高校生のプレゼンテーションだが、今回もたいへん見ごたえのある作品ばかりであった。

以上、教育フェスタの特に ICT 活用に関する部分について報告させていただいた。今後は、1人1台端末の活用が進む小中学校の取組等についても共有できる場となるよう、工夫・改善を図っていきたい。

#### 【事務局】

私からは、先ほどの教育長の挨拶にもあった、コロナウイルス感染症に絡んだ学校閉鎖期間中に、オンライン授業を実施した県立高校2校の状況等を中心に説明する。2月5日現在、表に示している2校でオンライン授業が実施された。また、下の表は、オンライン授業配信に備えて今年度に県で整備した資機材の一覧である。実施した2校に限らず、全ての県立高校・中学校でこれらの資機材は整備済みである。

オンライン授業の様子を写真でいくつか紹介する。この写真の先生は、書画カメラで資

料を示しながら説明するスタイルの授業である。ヘッドセットはBluetooth 接続の片耳タイプであるが、受講する生徒により明瞭な音声を届けられること、座ったり立ち上がったたり板書を利用したりする際に、有線接続の煩わしさが少ないことなどから概ね好評である。次の写真の先生は、板書しながら送信するスタイル、また、次の写真は、職員室や分室などの自席からオンライン授業を行っている様子である。このように、それぞれの先生が無理のないスタイル、単元に応じたスタイルで、工夫しながらオンライン授業を実施されている様子がうかがえる。

この2校には、簡単なアンケートにご協力いただいた。これから主なものを紹介したい。オンライン授業の実施に関して「配慮すべきこと・他校に伝えたいこと」としては、「教員同士が協力しあう体制を作っておくことが大切」ということが挙げられた。実際に教育委員会から我々が出向いてオンライン授業の様子を参観した際も、ベテランの先生の授業を新採3年目の先生がサポートする場面などを目にした。また、教員の性として授業については「あれもしたいこれもしたい」と欲張りになりがちだが、「完成度を高くしすぎず、できる範囲から徐々にという姿勢でないと、大変だ」という気づきも寄せられた。また、急なオンライン授業実施で困らないように、日頃から機器等に使い慣れておくことの大切さも挙げられている。実施2校で異なっていたのは時間割であり、通常時間割とオンライン授業用特別時間割のそれぞれでの実施であった。今後、それぞれのメリット・デメリットなども聞き取っていききたい。

最近では、どの学校も「協働的な学び」のスタイルなどを積極的に取り入れており、両校ともに、いかにして教員からの一方通行的な授業にならないように工夫するかの大切さを挙げている。県立学校で使用しているコミュニケーション支援ツールには、クラス単位よりも細かい集団に分ける、グループ学習に活用できる機能も備わってはいるが、生徒が実際に利用できるようになるまでのハードルは、現時点ではやや高いかと思われる。実施した教員の感想としては、「概ねうまくできた」「思っていたよりも有効」という感想が多く見られた一方で、通常授業のように目の前に生徒がいないことによる戸惑いもやや見られた。

受講した生徒の感想としては、下にあるようなマイナスの感想も見られたものの、「楽しかった」「わかりやすかった」といった声が多かったようだ。保護者からは、「安心した」という声もあった。この写真は、教室内で受講する生徒の様子である。実施しての困りごとや要望などとして、このようなものが挙げられた。アイコンを一目見て生徒把握ができればよいが、現在はポリシー上、生徒氏名を表示することができないため、「アカウント表示と生徒氏名を名簿上で突合して初めて生徒を把握することができる手間」に対する不満がやや目立った。また、通常授業の傍らで、同時にオンラインでの対応を求められるような場合は教員の負担も大きくなることから、どのような対応が現実的に可能であるかなどを県教育委員会でも探っていかなければならないと考えている。

### 【事務局】

Society 5.0 を生き抜く生徒たちに必要な力を身につけさせたいという声が、学校現場からも寄せられるようになってきた。そのような中、ソフトウェア企業から自学自習用の Web サイトを紹介していただいたため、学校へ情報共有した。その後、再度当該ソフトウェア企業から勉強会を開催しないかという提案をいただいた。そこで、令和 2 年度 of 取組として、三者懇談期間の午後を利用して、AI およびクラウドの生徒向け勉強会を開催することとした。当初は、会場を借り上げて実施する予定であったが、コロナ禍の状況を鑑みてオンラインでの実施とした。学校現場に希望調査を行ったところ、当初 300 人を超える申し込みがあった。そのうち白石高校商業科キャンパスでは、情報ビジネス科 2 年生 38 人が、正規の授業としてこの勉強会を受講した。また、県内の複数の高校から、クラウドに関する勉強会には生徒 54 人、教員 17 人が参加し、AI に関する勉強会には、生徒 59 人、教員 13 人が参加した。各学校で勉強会会場を設定したり、生徒が各個人の自宅で勉強会に参加したりするなどの形態をとった。生徒は、初めて触れる AI とクラウドの専門的な話に、興味津々という様子で聞き入っていた。

AI 勉強会に参加した、白石高校商業科キャンパスの生徒のアンケート結果では、「とても満足」と回答した生徒が 71 パーセント、「満足」と回答した生徒が 26 パーセントいた。また、複数回答とした勉強会参加の目的は「進学のため」が 55 パーセント、「就職のため」が 58 パーセントとなった。学校の先生方からは「学校の教員だけでは指導できない分野を生徒が学ぶ貴重な機会をいただいた」という声をいただいた。クラウド勉強会に参加した生徒のアンケート結果では、「とても満足」と回答した生徒が 64 パーセント、「満足」と回答した生徒が 36 パーセントで、全員が勉強会に満足したことが分かった。また、複数回答とした勉強会参加の目的は「進学のため」が 46 パーセント、「就職のため」が 38 パーセントとなった。このことから、生徒は、将来のために AI やクラウドについて学習したいと考えていることが分かった。また、生徒の自由記述を見ると、「新しいことを学ぶことができてよかった」「実技の勉強会も開催してほしい」等、大変前向きな意見が多くあり、生徒の関心の高さがよく分かる。さらに、「もっと頻繁にこの勉強会を開催してほしい」「もっと高度な内容についても学びたい」といった意見も寄せられた。

最後に、令和 3 年度以降の動きについて説明させていただく。生徒に好評だった勉強会については、残念ながら今年度のみ of 取組となるが、AI やクラウドに関する知識の認定試験は、引き続き学校で受験可能な体制を作ることが可能となった。今後は、提供されている自学自習教材を活用して学校を中心とした学習が進められ、学校で認定試験を受験する流れができてくることを期待しているところである。

### 【野中座長】

12 月からの短い期間であったが事務局から報告をしていただいた。報告の内容について委員の方々から何か質問や意見はないか。それでは、天野委員、その後に齊藤委員どうぞ。

### 【天野委員】

教育フェスタで鳥栖市の取組を発表させていただいたことは貴重な経験だったと思う。市内の学校において、タブレットが1台もなく ICT 支援員もいない中で、1人1台の ICT 環境を作るということでどのようにしていけばよいのかを考えてきた。各学校に ICT に堪能な先生方がおられるが、校長先生や若い先生を含めて、その考え方を共有し活用してもらえればと考える。また、今回の発表で ICT に堪能な先生方にスポットが当たったことは、たいへん素晴らしいことだと思う。

### 【齊藤委員】

資料2は、非常時におけるオンライン授業の実施についての資料であるが、ここから得られた知見は非常時だけでなく今後教室における先端技術の活用についても生かせるものと思う。そうした観点から、提案を2点ほどさせていただく。

1つには、現在教員や生徒の感想としてざっくりまとめているものを基に、今回のオンライン授業に係る成果や課題を、下記4つぐらいの観点に整理し、情報提供につなげられるとよいということである。

- 1 子どもについて：子どもたちにどんな道具を持たせて、どんな準備をさせて、どんな活動をさせたら、その結果どのような成果や課題があったか
- 2 使用した機材及びセッティング
- 3 授業のデザインと進め方：先生方一人一人の授業のデザインや、支援として、どのような進め方で、どのようなことをされたら、どのような成果や課題があったか
- 4 学校のサポート体制やシステム：オンライン授業を効果的に進めていくために、学校のシステムづくりとして、教職員間でどのような連携体制をつくり、どのような時間割調整などを行ったか

こうした4観点について、できれば、「事前の仮説（こんな問題意識をもって、こんな見通しをもって、こんなことをやった）」「結果と今後に向けて（このような成果や課題があったので、これは普段の先端技術活用でもいかせるのではないか）」という形で知見を整理しておけると、今回の経験を「非常時を各校の努力で乗り切った」といったところを超えて、今後の先端技術のより効果的な導入に結び付けられると考えられる。

また、今回の先生や生徒の感想から、先端技術の導入というものが評価法や授業の進め方の改善と連動して行っていくべきものだという示唆が得られる。例えば、先生方の感想には、「回答した生徒がすぐに分からず、ほめるタイミングがずれる」、「理解度や反応が分かりづらい」という課題があげられており、ICTをどう使うかという問題は、授業の進め方や、学びの見とり方とわけて考えられないことがわかる。そこでもう1点、これまで別々のセクションで、「教科をベースにした評価法や授業法の研修や研究」というものと、「ICTの効果的な活用のための研修や研究」と、分けて検討してきたところを結びつけて、統合

的な新しいサポート体制を今後に向けて考えていくと良いのではないかとすることを提案したい。

**【野中座長】**

ありがとうございました。具体的に提案をいただいたが、おそらくいろんな実践をさらに積みかさねて、それらをいくつかの観点に整理して、これから実施するところが参考すべきであるという内容であった。感想の中にも日頃からの積み重ねの部分もあるので、先行して実施した際に、このようにデータを取り、整理してフィードバックしていくことが重要。県教育委員会でも各県立学校等には、この結果を配布していると聞いているが、さらにそういった成果やそこでの気づきなどを次の実践につなげていくことが重要でないかとの意見であった。それでは、田口委員どうぞ。

**【田口委員】**

前回か前々回の委員会でも質問したかと思うが、オンラインでの授業をした場合の出欠の扱いや評価等の履修や単位に関わる扱いは何か法的な線引きが進んだのかどうかを伺いたい。

**【野中座長】**

この質問については、全ての意見や質問を聞いて事務局から答えていただく。他に意見や質問はないか。それでは、中西委員どうぞ。

**【中西委員】**

委員の方々からたくさんの貴重な意見ありがとうございました。私たちも同じオンライン配信をするにしても、毎回同じ方法ではなくメンバーで試行錯誤しているところである。例えば、始業式の校長先生のお話の場合は音声に気を使い、音声途切れのない方法で取り組んだ。他に外部講師の講演の場合は、画面共有をする時間が長いので、音声より画面共有をメインにした方法で行った。オンライン配信と一概にいつてもどのような使い方をするのかを考えている。そして、私たちが今一番頭を悩ませているのが、卒業式の保護者の参加において制限をする中で、どういった配信の方法がよいのか、配信はできるけどどの方法が一番よいのかなど他の学校も悩まれているところは同じだと思うので共有ができるようになればよいと思う。

もう1つは、先ほどの教育フェスタのプレゼンテーション大会で、本校も3作品を発表させていただいて最優秀賞と優秀賞をいただくことができた。振り返ってみると各学年から代表で出場したが、やはり発表内容が今までの学校での取組と異なり、コロナ禍だったからこそ高校生たちが考えて取り組んだことがよかったと思う。このような機会をいただいて生徒たちが主役として、自分たちがやったことが社会貢献につながったことが自信に

なったのでたいへん貴重な体験となった。

**【野中座長】**

ありがとうございました。コロナ禍で教育フェスタの内容もだいぶ変わったのかもしれないし、そこでの取組もかなり進んでいると聞いている。前半の話は、これから卒業式等をどうするかという話もあったが、県立学校間で実施後にフィードバックだけでなく、途中でもお互いに相談できるような情報をうまくコミュニケーションのルートをつくっておくことがよいと思われる。おそらく行われていると思うが、今までは対面で行っていたものがオンラインで実施できるので、学校を超えた、学校間で知恵を出し合いながら取り組んでみて振り返っていくと県全体として高まってくると考えられる。それでは、中野委員どうぞ。

**【中野委員】**

教育フェスタは、プレゼンテーション大会の審査員で関わらせていただいた。例年に比べてもたいへん熱気のあるレベルの高い大会だったと思う。今年は、コロナ禍ということもあり、会場での発表のようすをオンラインで広く中継をする試みが初めて行われた。そういう意味で、物理的に集まれない人に対して情報発信でき、非常に意味があった。教育関係の情報を広く発信する際に、オンライン中継の使い方はいろいろあると思われる。オンライン授業の報告を見ると、リアルタイムで生徒と結んだ授業だった。オンラインによる授業は、リアルタイムだけでなく、事前に教員が用意した資料や教材を利用して、生徒が自分のタイミングで学ぶという形式もある。それぞれ一長一短はある。事前に収録した動画などは、複数の学校で教材の共有ができるというメリットがある。リアルタイムの中継以外についても、他県を含めて情報収集して、より質の高い学びにつながるような取り組みを進めていただきたいと思います。

**【野中座長】**

ありがとうございました。それでは、佐藤委員どうぞ。

**【佐藤委員】**

3点目に報告していただいたAIとクラウドの勉強会についてだが、実はもともとAIやクラウドに関する資格認定制度というものがあり、メインのターゲットは高専や専門学校、大学生である。今回、佐賀県で高校生に初めて受講や受験をしていただいた。実は、他の専門学校グループで同じように受講していただき認定資格を受けていただいているが、受験率ではなく合格率からみると、今回受験いただいた佐賀県の高校生の方が高い結果であった。学校の中で教科として学んでいることというよりは新しい分野である。先ほどのパイチャートの中に、受講動機として、進学や就職に役立つだからなどがあつた。これか

ら Society 5.0 においては、AI をつくる側は少ないかもしれないが、使う側がほとんどである。世の中にどんなものがあり、どんなところに自分が進んだにしても、何が世の中にあって解決できるのか知る、興味を持つというような入口になると思う。高校生でも興味や関心を持ち取り組んで、結果を出しているということはすごく可能性を感じる。来年度以降だが、県内の高校生はアカウントを持っているので、形態を変えたにしても高校生にこういった機会を与えられたらと考えている。

**【野中座長】**

ありがとうございました。高校生の成績がよかったということはすごいことである。やはり、やる気や興味があった内容に参加をしたということであろう。他に意見や質問はないか。それでは、板橋委員どうぞ。

**【板橋委員】**

非常時のオンライン授業の実施の中で、校内ネットワーク回線の増強をお願いしたいという内容があったが、おかげさまで佐賀大学の本学部の方で特に附属中学校は、GIGA スクールの整備を行う中で、ネットワーク回線の脆弱性について心配をしていた。しかし、全クラスでオンライン授業を同時に行っても、ある程度は不自由なく使えるような状況であると校長から報告をいただいた。その点の整備状況については、佐賀県においてどのような計画で行われようとしているのか。それと、私も先日の高校生のプレゼンテーション大会の審査員として参加させていただいた。その中で控室でも話題となったが、まだまだ家庭等でのオンラインの回線の整備が難しいと聞いているが、今後の見通しなども聞かせていただきたい。

**【野中座長】**

ありがとうございます。それでは、先ほどのオンライン授業での出欠についての質問と、今の佐賀県におけるネットワークについての質問があったので、それぞれ事務局から回答をお願いします。

**【事務局】**

オンライン授業についての授業時数のカウントだが、現状ではまだ厳しいようである。遠隔授業の場合も受け側の教室に教師がいることなどの条件がある。今後は、緩和されていくのではないかと思う。また、各学校での状況等は、訪問をして話を聞くと授業機会の確保という点では、オンライン授業は非常に大事だという意見がある。しかし、受けた生徒の評価をどうするかが難しいという声を実際に聞いた。先ほど齊藤委員からも提案があったが、今後評価の仕方等についても県教育委員会や学校現場の声を拾いながら、有効な評価の仕方等を考えていく必要があると思う。今回、先ほど紹介した2校の配慮すべきこ



とを各学校に情報として知らせたところ、非常にありがたいという声もいただいた。各学校の校長先生からは明日にでも臨時休校になり、オンライン授業をやらなければならないときにこのような準備は大事だという感想があった。その他に、報告した2校で得られたノウハウ等を大いに参考にしたいという感想もあった。

#### 【事務局】

先ほど質問にあった通信回線について答えさせていただく。まず、以前にオンライン授業に取り組んだ致遠館高校では、動画がカクつくということではなかった。今回は、実際に2校で実施されたが、特に佐賀工業高校の初日に、動画がカクついて支障があったと報告を受けた。このため、教育総務課では、その時の通信トラフィックの確認を行った。県立学校では、通信帯域は1ギガbpsのベストエフォートで回線を確保しているが、オンライン授業の際に実際に使っていたトラフィックはピーク時でも約80メガbpsと十分の一程度であった。しかもこれはピーク時であって、ずっとそこに張り付いていたわけでもない。通信帯域の確保状況に問題があったというわけではないと考えている。要因としては2つのことが考えられる。1つは、学校から出た後の回線が混雑していた可能性。もう1つは、使っているビデオ会議ソフトのセッション数の問題。各学校ではフィルタリングをかけているが、そのフィルタリングが対応できるセッション数には上限があり、その上限を超えてしまった場合に画像がカクつくという事象が報告されている。これに対応するため、佐賀県では、コミュニケーション支援ツールを使用しているが、ブラウザ版とアプリ版があるところ、アプリ版を使う場合には、フィルタリングを回避してインターネットに直接抜けさせるというような措置を講じた上で、アプリ版の使用をお願いしている。今回の佐賀工業高校では、アプリ版を使用するようにとのアナウンスはされていたそうであるが、徹底されていなかったようである。学校からこのような事象の報告を受けたので、改めてアプリ版使用の徹底をお願いしたところ、2日目以降は、動画がカクつく等の事象は起こらずスムーズに授業ができたとの報告を受けている。

#### 【野中座長】

ありがとうございます。通信については、その時の状況や経路等のさまざまな要因があるので一概には言えないが、やはり一斉に使うという機会が増えていけば、どれくらい必要なのか、どのようなことが起こるのか、どう対応するかが分かってくると思われる。また、そういうことも含めて、県内で情報交換を進めていただきたい。それでは、報告事項をこれで終わる。

#### (4) 意見交換

イ 1人1台端末を活用した授業の実現に向けて～全県の取組提案～

### 【野中座長】

はじめに、1人1台端末を活用した授業の実現に向けて、全県でどのように取り組んでいくかについて、提案を事務局から説明をしていただく。

### 【事務局】

それでは、「1人1台端末を活用した授業の実現に向けて」ということで、今後、小中学校にも1人1台端末が整備されていく中、県ぐるみでICT活用教育を進めていくために共通理解したい基本的な考えについて提案させていただく。資料は11ページ、資料4からとなる。本資料は、一部削除、追加しているが、先の教育フェスタにおいて全県の取組として提案したものである。また、この全県の取組提案については、前回2回目の本委員会でも話題にさせていただいた。その際にいただいたご意見を参考にしながら、また、教育事務所、教育センターにも協力いただきながら、本資料の形にまとめている。今回は、特に「良質な学び」の中身に関する部分について、改めて委員の皆様方からご意見を頂戴できればと考えているのでお願いしたい。

まず、11ページ下段は取組の全体像で、佐賀県の目指す姿、道筋とその重点をイメージしたものである。佐賀県における次世代のICT活用教育と位置付ける「プロジェクトE」の中で、「学びのSAGANアップデート」と銘打ち、授業改善を全県で進めていこうというものである。この「学びのSAGANアップデート」の柱として考えていることを5点、この先のスライドで説明する。

12ページでは、「これまでの教育実践とICTのベストミックス」について、さまざまな教科・領域等において、教育効果を一層高められることについて触れている。下段は「個別最適化された授業の実現」について、1人1台端末で個別のニーズに応じられることについて述べている。13ページであるが、ここからが特にご意見等頂戴したい部分となる。前回の本委員会の中で、「良質な学び」の具体像を明らかにしていくことが重要とのご意見をいただいた。そこで、この良質な学びを「広がる学び」「深まる学び」「つながる学び」と定義し、こうした学びを通じて何が期待できるのか、また、それぞれの学びが実現している姿とはどういったものか、いくつか例を示している。

まず13ページ下段は「広がる学び」について。例えば、教科を横断して、学年の枠を超えて、表現の幅が広がる、興味関心が広がる、といったことをイメージしている。次に「深まる学び」について。例えば、試行錯誤して、何度も繰り返して、議論が深まる、思考が深まる、といったことをイメージしている。そして、「つながる学び」について。例えば、情報を蓄積・整理して、遠く離れた誰かと結んで、学習履歴がつながる、想いがつながる、といったことをイメージしている。以上、全県で意識を共有したい3つの学びについて、ご説明させていただいた。また、13ページ上段にあるように、これら学びの広がり、深まり、つながりの追求のため、児童生徒、教職員、保護者・地域が、この良質な学びを続けること、学び続けることが大切であると考えている。

15 ページを見て欲しい。さらに、良質な学びが実現している姿について、見取りの観点があるとよいといったご意見をいただいたことから、広がる、深まる、つながる学びを通して、期待したい、目指したい具体的な子供たちの姿を案として例示させていただいた。この部分は、教育フェスタ以降に追加したものとなる。例えば「広がる学び」を通して「興味関心が広がる」というのはどういうことか、については、「学年や教科の枠を超えて新しい情報取得への意欲が高まる」ということであり、具体的な子供たちの姿として、「小学生が工業高校生のものづくり動画を視聴し旋盤技術の追求を始める」ことなどが考えられる、といった整理である。現時点ではまだ教科、校種ごとといった詳しいものではないが、今後、委員の皆様をはじめ、関係各方面からご意見等をいただきながら作り上げていけたらと考えている。また、15 ページ下段は、1 人 1 台端末を活用することで時短・効率化が進み、「限られた時間の有効活用」につながることにについて。16 ページ上段は、「共通理解と共通実践」で一丸となり、教育効果を一層高めていきたいと思いますということについて示している。

最後に、16 ページ下段は「人的・物的環境整備」について。この部分は、教育フェスタ以降、より具体的な内容に差し替えたものとなる。教育フェスタの 12 月時点ではあまり詳しくお話しできなかったが、良質な学びの創造を支える環境づくりとして、令和 3 年度の重点取組「プロジェクト E プラス」を展開する。予定している取組の中には、これまで説明してきた内容を事業として具体化したものも含まれている。

以上、「1 人 1 台端末を活用した授業の実現に向けて」ということで、説明させていただいた。繰り返しになるが、特に 13 ページから 15 ページ上段の「良質な学び」を共通取組として進めていくことに関して、考え方、進め方等についてご意見・ご助言等いただきたい。

#### 【野中座長】

提案いただいた内容について、何かご意見やご質問があればお願いしたい。では、西与賀小学校の牟田先生。

#### 【牟田委員代理】

1 つ質問したい。16 ページの下段、GIGA スクール構想支援事業の話だが、「エリアコーディネーターを配置し市町立学校の支援強化を図る」と書いてある。エリアコーディネーターについて詳しく教えて欲しい。

#### 【栗本係長】

県内に 20 名前後、小中学校の ICT 活用教育のモデル的人材として活躍いただく方に ICT 利活用教育推進員ということでお願いしてきたが、来年度はこの方達をエリアリーダーと呼び、モデル授業の公開や実践事例等の情報提供をお願いしたいと考えている。さらに、

学校教育課の中に指導主事としてエリアコーディネーターを位置づけ、先のエリアリーダーの活動のほか、各種研修会の実施など、市町立学校に対する様々な支援をコーディネートしていくというものである。

**【野中座長】**

他にご意見やご質問がある方は。齊藤先生の手が挙がっている。では、齊藤先生。

**【齊藤委員】**

佐賀の新しい授業改善の取組の中で、「学びの SAGAN」のゴールイメージとなる「良質な学び」について具体像が共有されるべきということが、前回も議論されたところと思う。

15 ページに示された見取りの観点は、前回の議論を受けて出てきたものと思われるが、具体的なイメージを先生方と共有するツールとして効果的なのではないかと感じた。

他方、気をつけなければならないのが、こうした観点シートが実際に学校の先生方のお手元に届いたとき、どのように使われうるかという点である。仮に、チェックシートの授業を評定するようなものになったり、授業づくりを縛るものになったりということになると、やはり本来の目的と違うかなと思う。

今後、このシートを有効に機能させるには、このシートを出発点とした授業研究をとおして、この見とりの観点や例自体も見直しながら、私たちの学習観や授業観そのものを見直すと共に、新しい学習観・授業観に基づく授業デザイン力の向上を可能にする取組がどのようにしたら可能になるかを考えていく必要があるだろう。

具体的には、この先、各教科のバージョンをという話もあったかと思うが、それについても完成形を教育委員会で作ってお渡しするというよりは、例えば、一番右の「具体的な児童・生徒等の姿(例)」という部分が、各学校段階だったり教科だったり授業によって違うと思うので、ここのところを例えば研究授業などを行う際には各学校の先生方で、うちの子供たちにこの授業をやる場合だったらこういうものが深い学び、つながる学びに当たるのではないかと議論しながら書き入れるようなシートとして使われるといいのではないか。

そして実際、想定していた姿が授業で見られたかを皆で確認して、その通りにならなかったから悪いという話だけではなくて、良質な学びの定義の見直しにもつなげられるとよいと思う。例えば、「広がる学び」は現在「教科を横断」する学びと位置づけられているが、必ずしも教科を横断していなくても、児童生徒が授業前に知っていることや経験と授業で学んだことを結びつけて理解を広げていくということもあり、それも「広がる学び」と言えるかもしれな。授業研究をとおして、こうした仮説を検証しながらシートを見直していく、そうした形で現場の授業研究に活用されていくような実装の道筋を合わせて描いておけると、このシートはより効果的に活用できるようになるのではないかと思う。

**【野中座長】**

ありがとうございます。続いて、井手さん。

**【井手委員】**

齊藤さんからのお話に、現場の教員たちは励みをもらうのではないかと思った。今回、GIGA スクールは新型コロナ感染拡大防止の対策として追い風を受けていい進み方をしていてと捉えている。教員にとって、自分たちが教え込まないといけないという価値観を大きく変えてくれるし、子供たちにはすごく才能のある子たちがたくさんいて、その子供たちからの発信があったりとか、子供たち同士の学び合いがあったりとか、ともに学び合いができる環境となるのではないかと思う。一つ心配なのは、家庭環境への支援について、この通信環境があって当たり前である状況で、教育行政が支援できるかということについてはしっかり説明して欲しいところである。

**【野中座長】**

ありがとうございます。続けて、では、山下先生。

**【山下委員】**

良質な学びの中をつながる学びについて意見を述べさせていただく。現在、総合的な探究の時間等で、探究活動というものが盛んに行われるようになり、ますます広がりというものが見られるようになっている。実際に、学習用 PC が情報収集の端末になっているが、本当に欲しい情報の収集のためのツールにはまだ成り得ていないという感じを持っている。それは、外部機関と双方向のやり取りができるような環境にない、具体的には、メールとかオンライン会議が教師と生徒を結ぶものにはなっているが、生徒が公的な機関である市役所とか大学の研究室へ直接つながって意見交換できるような、もしくは、こちらの取組に関して助言やアドバイスを頂けるようなシステムというものが、技術的には可能なのかもしれないが、県として推進しているような感じを受けない。セキュリティやリテラシーの問題などいろいろと課題があるかと思うが、今後も新学習指導要領に向けてはそういった観点で外部機関と生徒が直接つながるような「つながる学び」が実現するような環境整備や呼びかけをお願いしたい。

**【野中座長】**

ありがとうございます。私も高校生からいきなり「テレビ会議で質問したい」というお願いを受けたことがある。社会に開かれたカリキュラムということも言われているので、そのような方向でも進めてもらえばと思う。たくさん挙手があっているが、森本さん、天野さん、佐伯さんの順でお願いしたい。

#### 【森本委員】

今の意見に続けての話になるが、16 ページにあるように、物的環境の整備が広く標準的に ICT 普及には重要かと思っている。私たちは新聞社なので、取材で 20 市町に赴くことが多いが、町によってデバイスの扱いにかなり違いがあるというか、例えばタブレットのカメラ機能を使わせないとか、ブラウザに関しては広告が出ない仕様であるとか、基本的に制限をかける動きの方がかなり耳に入っている。その中で県下一律にどういった環境づくりをしていくのかという意味では 20 市町が教育委員会ごとにどういった考えを持っているのか、そのような事前調査をしているか、しているのであれば、どう平準化してこの事業を均して進めていくのかといったところも、この GIGA の進め方においては非常に重要な点かと思う。市町のでこぼこ具合をどう把握されて、どう持っていくのかという点について、ぜひ聞きたい。

#### 【天野委員】

市町は、このコロナの影響もありいろいろと心配な部分がある中で立ち上げて進めてきたが、そういうことを含めて、県からもしっかりとサポートして頂きたい。今回は、GIGA スクールのエリアコーディネーターを新しく学校教育課が設置するという期待しているが、これに対しても状況を踏まえながら進めてもらえればと考える。もう一つは、学びの広がり、深まり、つながりの追求ということで、学びの SAGAN アップデートなど素晴らしい資料をまとめて示していただいております、ありがたい。新学習指導要領にもあるとおり、主体的・対話的で深い学びということでよいと思うが、こういった良質の学びがどのくらいできているのかを踏まえて取り組まなければならないと考える。GIGA スクールで SAGAN アップデートが改めて出てくることは分かるが、「これまでの教育実践と ICT のベストミックス」とあるので、この部分を大事にしながら、良質の学びの方向をしっかりと示して進めていただければと思う。

#### 【佐伯委員】

保護者の立場からということで、教育委員会と先生達は ICT のお話をずっと進められていると思うが、コロナ禍になって初めてオンラインの授業とか ICT が進んでいるということを知ったような感覚を持っている保護者のほうが多いような状態だと思う。特にオンラインということに関しては、保護者は、現在どのようになっているのか、うちの子は使っているのだろうか、という不安が多いと思うので、やはり保護者に向けても、このような活動をしている、子供達にこういった教え方をしているというのを開示していただくと、保護者は安心感を持つし、県が進めていっているのが分かるというだけで、とても安心して県の動きを見ていけると思う。今後のオンラインの話もあるが、家庭環境によっては IT 機器を全く触ったことが無いお子さんも出てくると思う。普段から使っている子と、全く使ってなく学校で初めて触るといったようなところで差も出てくると思うので、そういっ

たときの教え方であるとか対応をしっかりと想定しておいた方が、子供達の中で使える子、使えない子でいろんな区別とかが出てこないようにして欲しい。

**【野中座長】**

ありがとうございます。保護者の方へは、各市町教育委員会からもいろいろな情報が発信されると思うが、県としても、というお話と、なかなかオンラインに繋げない家庭への支援というのも重要な施策になってくると思う。今、保護者の立場からということでお話ししていただいたが、竹下さん、西岡さんはどうか。では、竹下さん。

**【竹下委員】**

ICT を活用した教育は必要だと思う。機器の取扱いについては保護者もナーバスになっていると思うので、そういったところのケアも同時にしていかなければならない。また、この ICT を活用した授業というのは、全員一斉にやることも必要だが、例えば、学校に通えない児童生徒に対して率先して利用していくとか、そのような取組があってもいいのではないかと思う。

**【野中座長】**

ありがとうございます。では、西岡さん。

**【西岡委員】**

私も皆さんの意見と同じような考えであるが、保護者への PR の中で、具体的にこのような効果が望めますとか、数字で表すとか、見えるように工夫をして伝えた方がより理解も高まっていくのではないかと思う。

**【野中座長】**

ありがとうございます。いくつか質問があったかと思うが、事務局の方からお願いしたい。

**【事務局】**

森本委員から「各市町で、利用に関する制限等についてどうなっているか状況把握は」ということであった。県がまとめて把握しているということはないが、それぞれ市町ごとに入っているシステムが違う、ポリシーが違うという中で、各市町とも活用と制限の折り合いをつけるのがなかなか難しいといった状況のようである。今回、このコロナ禍でオンライン教育というものが全国的に広まったことを受け、学校が使いやすいように前向きに検討していただいているものと考えている。

ちなみに、先日、県が主催する市町立学校向けのオンライン研修を実施し、各学校に一

人ずつおられる教育情報化推進リーダーの先生の全てとつながることができた。市町におかれては、このことも一つのきっかけとしながら、少しずつ検討を進めていただければと思っています。

#### 【野中座長】

それぞれの地域でのシステムの扱いや制限の問題というのは、かなりばらつきがあるようで、県としてこういう方向にして皆でやりましょうと言っても最初からはうまくいかないと思われる。国は、中教審の答申では、基本的に端末は持ち帰りを原則とするという書き方をしているが、その部分でも各市町村で違いが出てきているので、これは当面、ばらつきは仕方がない。ただ、少なくとも県域くらいでは、市町村を含めて情報交換をして、どういう風の実現しているのか、どこに課題があるのかとか、そういうことを共有しながら皆で問題解決をしていくということしかできないのではないかと。それには、しばらく時間がかかると思う。当面は、市町村等が、教育委員会も各保護者様宛に色々な文書を出したり、情報を出したりしていくと思うが、共有をしながら皆で考え乗り越えていくところかと思う。

他に意見はないか。では板橋さん、牟田さんの順で。

#### 【板橋委員】

先ほどの資料の 15 ページの上段について、学校側でとか先生が授業でという視点での話も結構あるが、保護者の方々からの意見も考えてみると、例えば、先日の教育フェスタのプレゼンで FPV ドローンで優勝した方は、大人が思いもしないような、かなりレベルの高い扱い方、発想であり、自分でどんどん調べていたようだった。1人1台のメリットというのは、15 ページ上段の資料で具体的な児童・生徒等の姿というところで、先生方から見た姿もあると思うが、生徒がどんなことをやってみたいのかがあって、生徒からこんな使い方したいというのがあれば、聞き取っていただき、それに繋げていただくような先生のバックアップがあると、1人1台のメリットとして大きいと考える。

#### 【牟田委員代理】

校長会の立場から、佐伯委員、竹下委員のお話に対し少し回答させていただく。家庭環境によって接続の問題が出てくるということで、各市町によっては、導入を LTE 回線にして 20 ギガまでを使えるようにするとか、または、ポケット Wi-Fi を接続ができない家庭に貸し出しをするという形で格差をなくそうと取り組んでいる。佐賀市ではまだそのような話が出てないが、小さな市町ではそういった取組が進んでいるところである。また、家庭環境によって、使える子と使えない子が出てくるのではないかと、という危惧があることについて、これは、小学校段階から1台の端末を使うとなると、解消できるのではないかと考えている。私の学校では、フューチャースクール事業で平成 23 年より1人1台で子供達が



端末を使っていた。今は1人1台ではないが、当時使っていた子供達は誰もが端末を使えるようになっていたので、小学校段階から使っていくことで解消できるのではないかと思う。最後に、学校へ通えない子への導入ということであるが、私たちもそういったところに何とか手が届かないかということで不登校のお子さんに端末を渡し、リモートで授業参加ができないかなど模索している。リモートで授業参加した場合に出席扱いにできないかとか、そもそも家庭になかなか入れないといったところも多いという壁もあるが、努力しているところである。

**【野中座長】**

ありがとうございます。まだまだご意見があるかと思うが、次の意見交換に移る。

ウ 大学1年生を対象とした情報活用に関する意識調査について

**【野中座長】**

大学1年生を対象とした情報活用に関する意識調査について、事務局から願います。

**【事務局】**

今年度も大学1年生を対象とした、情報活用に関する意識調査を実施した。集計結果を報告する。資料は、資料ナンバー5で、17ページからになる。今年度も、佐賀県内の四年制大学に在籍する1年生を対象として調査を行い、合計590名からの回答を得た。調査用紙は、資料21ページにある。「あなたは次のことがどれくらいできますか」の問いに、できる、ややできる、あまりできない、できないから1つ選択、「あなたは、次のことをどのくらいしますか」の問いに、よくする、時々する、あまりしない、全くしないから1つ選択してもらった。問2は、「あなたは次のことがどれくらいできますか」と、主にファイル操作や、文章ソフト・表計算ソフトなどの操作場面における活用スキルの意識を問うもの、問3は、「あなたは次のことをどのくらいしますか」と、主に情報の収集・整理・分析・判断の場面や、ネット・アプリなどの使用場面における活用頻度の意識を問うものとなっている。

まず、「主にファイル操作や、文章ソフト・表計算ソフトなどの操作場面における活用スキルの意識を問うもの」についての問いの結果となる。手元の資料17ページにグラフがあるが、白抜きで示している左2つの数字の合計がこのスライドの表の数字となる。例えば、設問1のタイピングについては、50.4と32.2の合計が、82.6となるので、この表に82.6を記載している。スライドでは、県内の公立高校出身の学生とそれ以外の学生で比較をしている。右側の差については、県内の公立高校とそれ以外との差を示している。タイピングスキルやファイルの整理など、基本的な活用能力は、他県出身の学生より割合が高くなっている。佐賀県の県立高校出身者は、高校で1人1台のパソコンを使用しているた

め、操作方法も含めて基本的な事項が十分に身につけていると言える。表計算ソフトの項目についても、他県出身の学生の数値を上回っている。特に、プレゼンテーションソフトの使用については、1人1台のアドバンテージが数字として表れている。総合学習など、プレゼンテーションソフトを活用した学習の機会が多く設けられており、大学においても引き続き活用ができていると考えられる。一方、プログラミングについては、昨年度と同様に数値自体が低い。プログラミングは、まだこれからというところである。

次に、問3の「主に情報の収集・整理・分析・判断の場面や、ネット・アプリなどの使用場面における活用頻度の意識を問うもの」についての結果である。手元の資料は19ページになる。項目1の「発表の際、自分とは異なる視点での質問があることを想定すること」という質問に対しては、差があまり出なかった。項目2、項目3については、いずれも数値が低くなっている。一方、情報セキュリティに関する項目5については、県内外ともに高い数値が出ている。項目7については高い数値を示しており、オンライン授業の定着がうかがえる。そのオンラインに伴って、項目8についても県立高校出身の過半数の学生が「よくする」「時々する」と答えている。

参考までに、昨年度の意識調査の結果を示している。お手元の資料の右半分である。令和元年度も同じ質問内容であり、今年度の結果と比較ができる。まず、比較をしてみて、数値が高くなり、差も大きくなった項目について。令和2年度の数字が伸びているものとしては、まず表計算ソフトの項目が挙げられる。昨年度は項目6の「関数や数式を用いて分析すること」の数値が低かったが、今年度は約六割の学生が「よくする」「時々する」と回答しており、その差も大きくなって。項目6の「複数の資料から変化や傾向を読み取ること」についても、数値が高くなり、大きな差が見られた。先ほどの「表計算ソフトのグラフを比較」「関数や数式を用いて分析」などからも分かるように、表計算ソフトの応用的な部分までできるようになり、表やグラフなどの資料の読み取りにも強くなったのではないかと考えられる。次に、数値が高くなったが、差は小さくなった項目について見ていく。タイピングは1人1台端末のアドバンテージが十分に活かしている項目であるが、他県出身の学生についてもそのスキルは高くなっており、ファイルの整理についても同様の結果となっている。差は少なくなったが、県内外を問わず、数値自体は昨年度よりも高くなっており、いい傾向であると捉えている。また、プレゼンテーション能力についても、依然として県立高校の学生が高い水準にある。これも差は小さくなったが、9割に迫る数値となっている事にも注目したいと思う。問3のこちらの2項目「発表の際、自分とは異なる視点での質問があることを想定する」、「得られた情報が正しいものかどうかを根拠をもとに判断する」では、特に項目5について県内外を問わず高い数値となっており、学生が情報セキュリティにも十分に気を配っていることが数字に表れている。次は、数値は変わらないが、差が大きくなった項目について見ていく。項目⑨のプログラミング、項目2の簡単なフローチャートについては、昨年同様、低い数値となった。特にプログラミングについては、昨年度、その伸びが期待されたところであった。今後も、扱っていく機会が増え

ていくと思われ、これからの推移にも注目したい。項目3の「ソフトやアプリを活用して、互いの考えを交換し共有すること」については、その差が微増であり、昨年と同様の結果となった。項目4の「調べる手段を使い分ける」については、県立高校以外の学生の数値が低くなっており、県内高校以外の学生ほど、必要な情報を得る手段が限られているといった傾向もあると考えられる。例えば、スマートフォンでいろいろと出来るようになり、図書や新聞へ向かなくなっているような傾向があるのではないかと推察され、興味深い数値である。次に、数値は変わらないが、差が小さくなった項目である。文章ソフトの使用については、県立高校以外の学生の数値が高くなっている。これはプレゼンテーションソフトで分かりやすく工夫することにも同様の事が言える。パソコンの1人1台環境が全国的に整っていくにつれて、その差は縮まっていくこととなりそうである。次に、数値が低くなり、差も小さくなった項目が一つあった。文章ソフトの使用の部分についてであり、昨年同様に、単に使えることだけでなく、見やすさ、説得力にも他県出身者に比べて意識が向いているというところは変わりが無いが、もしかしたら文章ソフト自体をあまり使わなくなっているのではないかと推察しているところである。今後もまた調べていきたい。

最後に、オンライン授業に関連した項目についてまとめた。項目7の「動画サイトなどで講義や授業の動画をみること」では、昨年より数値が大きく上昇している。また、やらなければならないというところで、他県との差も小さくなっている。それに伴い、インターネット上にある問題を解いたり、学習ソフトやアプリを使って勉強したりすることについても他県出身の学生よりよくすると結果が表れた。1人1台のパソコンを使ってきたことで、デジタル教材やコンテンツについても、特に抵抗なく受け入れており、オンラインについてもスムーズに移行できている。さらに、使ったことのないアプリやソフトにも積極的に使ってみようという意識が高いのではないと思われる。

最後に、まとめを示す。昨年度と同様に、県内高校出身者とそれ以外との比較が、より鮮明に、差が際立つ結果となったが、その一方で、講義動画の視聴やタイピングスキルなどその差が見られなくなっている項目もあった。特に、オンライン授業の普及に伴い、関連する項目にはその結果が表れていた。今後も同様の調査を大学1年生に対して引き続き行い、経年変化を見ていき、活用等につなげていきたいと考えている。特に令和元年度から3年度の3年間で、コロナ前とコロナ後の変化の様子が明らかになるのではないかと考えている。大学1年生を対象とした情報活用に関する意識調査、報告は以上である。

#### 【野中座長】

ありがとうございます。では、この件について、委員から質問、意見があればお願いしたい。中西先生、天野先生、齊藤さん、佐賀県の高教組と表示されているので、この順でお願いしたい。

#### 【中西委員】

非常に興味深いアンケート結果だと思った。17 ページ項目 1 のタイピングの速さについては、県立学校でも 5 月に「朝の呼びかけ大作戦」ということで、メールで先生に健康観察の返信をすることがあったが、本校でも 1 学期間ずっと学年の取組として学校再開後も続けた学年があった。生徒の感想の中にも自分で分かるくらいタイピングが速くなっていったと書いていたので、活用のスキルというのは日常的にどれくらい使っていくかというのが影響していると感じた。あと、項目 6 とか項目 7 について、本校では表計算ソフトやプレゼンテーションソフトを使う頻度が非常に高いので、やはり使い続けることで数値が高くなると思う。本校の場合は、できる、ややできる、を合わせると 90 パーセントくらいになっている。今後、文章ソフト、表計算、プレゼンテーションに合わせて、来年度もオンラインが続くようであれば、もう 1 つメールソフトのスキルを調査するというのも一つの方法かな、と思った。19 ページ、20 ページにもあるが、本校でもメールに添付して課題を提出するとか、大学生であれば特にそうだと思うが、先生がアップロードしたファイルをダウンロードしたり、自分が課題をアップロードしたりといったことができるかどうかというのも、今年の佐賀県の県立高校卒業生は、来年度大学に入ってもスキルが高い結果になるのではないかと考える。重ねて、19 ページ 20 ページの項目 5、項目 6 の「正しいものかを判断する」「必要なものを読み取る」というのは、先ほどの良質な学びの中に「広がる学び」などがあり、いろんなことがネットから情報がとれるようになるので、その中から自分に必要なもの、どのようなものが正しいのか取捨選択しなければならないのか、そういった力もあわせて子供達には指導側として広がる分、取捨選択能力とかを指導していかなければならないと感じた。高校 3 年生が、今年全国の高校生とオンライン会議をしたが、やはり佐賀県の高校生は恵まれており、他の学校は 1 人 1 台がないので、話しながらつくづく感じたとの感想を生徒が書いていた。

#### 【天野委員】

この県立高校出身者の素晴らしい数値に驚いている。今後は、小学校 1 年生から中学校 3 年生まで、さらに高校 3 年間の 12 年間ずっとやっていかななくてはならないので、それを考えると来年度も重要になるのではないかと思う。私たちもプログラミング学習ということで 1 人 1 台のタブレットを使ってやらなくてはいけないので、これについては、オンライン教育自体についても大きな課題を持っている。やっていかななくてはならないと思っ

てはいるが、難しいことだと感じている。

#### 【齊藤委員】

意識調査が主観的なものなので、対応する能力実態の調査をぜひ今後、検討いただきたいと思う。仮に能力実態の調査を行うための調査問題を作っておけば、それが、これから提案していく SAGAN の見取りにも使えるし、他県や大学でもそうしたニーズは高まっていくはずなので、先駆例を示すことになるのではないか。

具体的には、例えば、問3の「あなたは次の事をどのくらいしますか」というところで、「表やグラフなどの複数の資料から必要なものを選ぶ」とか、「得られた情報が正しいものかどうか、根拠をもとに判断する」という項目であれば、「わざと目盛りがすごく大きくなっているグラフなどを用意して、このグラフを使ってテレビでXXという報道をしたら、どういう弊害が考えられるか」みたいなことに答えてもらうような問題に答えてもらえるといい。

こうした問題を使った実態調査は、悉皆でなくても、一部の学生に実施できれば、主観調査の「よくする、時々する、あまりしない、全くしない」の解答とクロスさせてみることで、ICT活用力の実態についてより説得力のある知見が得られるのではないかと。

#### 【田口委員】

齊藤先生とも関連するところであるが、結局、本人ができていると思っていることと実際にできているかということとは違うということであり、これだけを見て、この評価が他県と比べてどのようになっている、ということはなかなか言いにくいのではないかと考える。ただ少なくとも、本人たちが苦手意識を持っていないといえるところは良いのではないかとと思う。そのような意味では、最初に佐賀県内とか県外とか、自分専用のパソコンを持っているとか持っていないとかそういう区分けもあるので、この1番から4番までの人それぞれでどう違うのかという方法で比較してみると、何か見えてくるものがあるのではないかと考える。パソコン1人1台を持っていれば、大体こういうふうになるのではないかと。ということであれば、ただ持っていることだけに意味があるということかも知れない。そのあたりを比較するためには、必要だろうと思う。

#### 【板橋委員】

ちょっと違う視点から話をさせていただく。大学で1年生に関してはオンライン授業の状況がうまくいっているかどうかということについてアンケートを取ったが、回答率も非常に高かった。その中で、オンライン授業とICT活用が進む中でも危惧することとしては、トイレとお風呂以外ではほとんどパソコンの前に座っていると言う、とても疲れているということを感じて書いてあったことである。あと、明確に、今の1年生と2年生以上の学生は、人との接し方が違う。最初はコロナでキャンパスに来られない地域にいて、対面で呼んだときに感謝されることがあったくらいで、何かほっとしましたと、そういう一面があった。今後、この形の授業が進んでいく中で、先生方も力が入ってしまっただけで課題が多くなったり中身が厳しくなったりしているが、評価方法についても考えていなければならない。プログラミングについては、人の真似をして、人が作ったものをコピー、ペーストしながら覚えていくとか、他の学習ではやってはいけないようなところであるが、基本的なことを覚えて自由に使うということではなく、真似していくうちに段々分かって

いくというような導入の部分もぜひ考えてもらいながら、やっぱりまたその精神的な障壁が大きいことをあちこちで目にするので、その部分を壊していくような方法が考えられないかなという風に思っている。

**【野中座長】**

ありがとうございます。この調査は以前から話題になっているが、本格的にやろうと思うとおそらく e テスティング のように行う必要があるだろう。国も情報活用能力調査を復活させてまたやるようなことを伺っているが、まあそのようなものをやるのは、県レベルではかなり大変かと思うが課題として持っていければと思う。

全体を通して、まだ発言を希望する方はいるか。活発な議論に感謝する。これで報告意見交換について用意したものは終了したいと思う。では、この後の進行について、事務局の方で願います。

エ 教育委員会からお礼の言葉 青木副教育長

(5) 事務連絡

**【事務局】**

改善検討委員会の今後の開催については、各学期に1回を基本としており、来年度の1回目の開催については、1学期の5月下旬から6月頃で計画したいと考えている。なお、本日配布している資料については、後日、佐賀県のホームページに掲載させていただく。その際に、資料の修正等が必要な場合もあるので了承いただきたい。

(6) 閉会